

大学入学前の大学観は入学後の大学生活適応をどのように予測するか¹

—入学前から入学後2年間にわたる縦断的データに基づく検討—

水野 邦夫

問題

大学入学者の大学生活適応に関する研究は「古くて新しい」問題と言えるかもしれない。そのルーツを探るのは難しいが、わが国の場合、平成4(1992)年を境に18歳人口が年々低下の一途をたどる一方で、大学等への進学率が年々高まる状況が続き、文部科学省(2020)によると、令和2(2020)年度の大学(学部)・短期大学(本科)進学率は58.6%、大学(学部)進学率は54.4%で、ともに過去最高を記録している。このことは、多様な学生が大学に入学してきていることを示しているとも考えられ、彼らの大学生活への適応に関する問題は、今後もさらにクローズアップされていくことが予測される。

大学入学者の大学生活不適応の原因としては、本意入学(例:行きたい大学に合格できず、しぶしぶ今の大学を選択した、他に行きたい大学があったが、諸事情で今の大学を選択するしかなかった)、友人関係の問題(例:友だちができない、初期の友人関係形成で失敗した)、学力不振(例:大学の授業についていけない)、学部選択ミスマッチ(例:ある学部で学べると思ったことが学べない)など、これまでさまざまな指摘がなされ、それに伴う研究も多数行われてきた。

その中であって、近年、入学前の大学に対するイメージと現実の大学生活との間の期待の差(ギャップ)に焦点を当てた研究が散見される。たとえば、半澤(2007)は大学入学前に抱いていた大学での学業イメージや期待と入学後に経験した学業との間のずれによる否定的な違和感を「学業に対するリアリティショック」と捉え、それを測定する尺度を作成しているが、リアリティショックに関するほとんどの因子が、授業・学業意欲の低下や学業的自己疎外感との間に有意な正の相関($.12 \leq rs \leq .63$)を有することを明らかにしている。また金子・平林・菅沼・大日向・丸山(2015)は、理学療法学科に入学した新生入生に対し、入学後の大学生活イメージの適合感や大学不適応感などを調査し、イメージ不一致群がイメージ通り群よりも大学不適応の得点が有意に高いことなどを報告している。さらに千島・水野(2015)は大学入学前の大学生活への期待と入学後の生活とのギャップについて検討し、入学後の大学生活での時間的ゆとりがある方向に感じている者は入学前の時間的ゆとりへの期待とアパシー(無気力)傾向との間に負の関連が示され、また、入学後の友人関係が順調な方向にあると感じている者

は入学前の友人関係への期待とアパシー傾向との間に負の関連がみられることを見出している。

このように、入学前の大学生活に対するイメージから入学後のイメージのマイナス方向のギャップが大学入学後の大学生活適応に負の影響をもたらす可能性は、実証的にも示されている。しかし、これらの研究はいずれも大学入学後に入学前のことを想起して回答させたデータに基づいているものや、ある一時点での調査であるものが多く、入学前のデータを含め、大学へのイメージや入学前後でのイメージのギャップが大学生活への適応をどのように予測するかを縦断的に検討した研究については、管見の限り、見当たらないようである。

そこで、本研究では、大学入学予定者の入学以前から入学後2年間の縦断的データに基づき、1) 大学入学前から入学後にわたる大学イメージ(大学観)がどのように変化するか、2) 大学入学前の大学観ならびに入学後の大学観が大学生活への適応感をどのように予測するか、を中心に検討すること目的とした。

方法

調査対象者

2015年～2018年に一大学の心理系学部に入学者、心理学関連の授業を受講した大学生に下記質問紙への回答を求めたところ、462名(男子235名、女子227名。入学後1年次4月期の平均年齢は18.16歳、 $SD=0.55$)が少なくとも1回以上の回答に応じた。なお、このうちの291名(男子151名、女子140名)は、入学前年度の2月期に大学主催の入学準備行事に参加し、後述の大学観尺度への回答に応じた²。

心理尺度

調査に際し、下記の心理尺度を用いた。

大学観尺度(杉浦・尾崎・溝上, 2003)「大学とはどういうところか」についてたずねる尺度で、「出会い」・「消極的モラトリアムを過ごす」・「勉強」・「自分探し」・「将来準備」の場に関する各5項目、計25項目からなる。回答に際しては、「非常にあてはまる(5)」から「全くあてはまらない(1)」までの5段階で評定できるようにした。

学校生活に対する意識の調査項目(二宮, 1990)「学校適応—脱学校」という次元からなる尺度(以後、大学適応尺度という³)15項目および「仲間志向—孤立志向」からなる

尺度(以後、仲間志向尺度という)11項目の計26項目からなる。回答に際しては、「非常にあてはまる(5)」から「全くあてはまらない(1)」までの5段階で評定できるようにした。なお後述するように、調査は複数回にわたり、縦断的に行われたが、そのうちの2016年1月、4月、7月、10月の実施分に、同じ内容の項目を重複して質問紙に掲載したり、たずねるべき項目が掲載されなかったりするミスが発見されたため、重複分に関しては先の方に出題された項目の回答を有効回答とした。最終的に、すべての調査データについて、大学適応尺度は14項目、仲間志向尺度は9項目を採用した⁴。

実施時期・手続き

先に述べたように、一部の調査対象者は大学主催の入学前準備行事に参加し、その際に大学観尺度への回答を求めた。回答にあたり、調査は大学に対する考え方を心理学的見地から研究することを目的としていること、データは研究以外の目的で使用しないこと、個人のデータを特定した形での研究は行わないこと、協力できない場合は無回答のまま提出してもかまわないことなどを文書および口頭で説明した。

大学入学後の調査対象者に対しては、心理学関連の授業時間の一部を利用し、入学から2年間にわたり、4月下旬ごろ(前期開始期)、7月下旬ごろ(前期終了期)、10月上旬ごろ(後期開始期)、1月下旬ごろ(後期終了期)に、大学観尺度および学校生活に対する意識の調査項目への回答を求めた。なお、調査対象者への説明はほぼ上述の通りで、文書もしくは口頭で行った。

結果

分析にあたっては、IBM SPSS Statistics 27, HAD 17(清水, 2016)およびExcel 2016を使用した。また、無回答や記入洩れのあるデータは当該分析の都度に除外したため、分析ごとにデータ数は一致していない場合がある。

各尺度の内的整合性について

大学適応尺度、仲間志向尺度および大学観尺度の各尺度の内的整合性を調べるために、各測定時期における各尺度について、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、大学適応尺度は、.830(1年次1月期) $\leq \alpha \leq$.849(1年次7月)、仲間志向尺度は、.843(2年次7月期) $\leq \alpha \leq$.865(1年次7月期)であった。また、大学観各尺度は、出会いの場は .830(入学前2月期) $\leq \alpha \leq$.905(1年次10月期)、消極的モラトリアムを過ごす場は .793(入学前2月期) $\leq \alpha \leq$.878(2年次1月期)、勉強の場は .724(入学前2月期) $\leq \alpha \leq$.833(2年次10月期)、自分探しの場は .770(入学前2月期) $\leq \alpha \leq$.863(2年次10月期)、将来準備の場 .771(1年次4月期) $\leq \alpha \leq$.841(2年次7月期)であった。これらのことから、各測定時期における各尺度の内的整合性には十分な高さのあることが確認された。

大学適応・仲間志向の変化について

大学入学時から2年次終了までの間に、大学生活への適応感⁵がどのように変化したかを調べるために、すべての回に記入洩れなく回答した者について、大学適応尺度および仲間志向尺度の合計得点の平均値やSD等を算出し、各尺度得点(1項目あたりの平均得点)を従属変数とした1要因の分散分析を行った⁶。

その結果、まず、大学適応尺度では有意な結果が認められた($F(4.9, 1289.3) = 20.10, p < .001, \eta_p^2 = .072$)⁷。そこで、多重比較(Bonferroni法による。以下同様)を行ったところ、1年次4月期は他のどの時期よりも大学適応尺度得点が高く、1年次10月期および2年次4月期は2年次7・10月期よりも高く、1年次1月期は2年次10月期よりも高く、2年次1月期は2年次10月期よりも高かった(Table 1参照)。

また、仲間志向尺度についても有意な結果が認められ($F(5.2, 1368.2) = 2.96, p < .05, \eta_p^2 = .011$)、2年次4月期は1年次7・10月期および2年次7・10月期よりも得点が高かった(Table 1参照)。

各大学観の変化について

次に、大学入学前から2年次終了までの間に、各大学観がどのように変化したかを調べるために、同様に各尺度得点の平均値やSD等を算出し、各尺度の得点(1項目あたりの平均得点)を従属変数とした1要因の分散分析を行った。その結果、自分探しの場以外で有意な結果が得られた(出会いの場: $F(5.6, 924.8) = 8.06, p < .001, \eta_p^2 = .046$; 消極的モラトリアムを過ごす場: $F(5.8, 960.0) = 3.48, p < .01, \eta_p^2 = .021$; 勉強する場: $F(6.8, 1111.8) = 4.41, p < .001, \eta_p^2 = .026$; 将来準備の場: $F(6.6, 1092.1) = 2.46, p < .05, \eta_p^2 = .014$)。それぞれについて、多重比較を行ったところ、出会いの場については、入学前2月期が1年次7月期以降のどの時期よりも得点が高く、1年次4月期は1年次1月期よりも高かった。消極的モラトリアムを過ごす場については、1年次4・7・1月期は2年次10月期よりも高かった。勉強の場については、入学前2月期は1年次7・10月期よりも高く、1年次4月期は1年次7・10月期および2年次10・1月期よりも高く、将来準備の場については、2年次4月期が1年次7月期よりも高かった(Table 2参照)。

入学前後の各大学観と大学生活への適応感との関係について

次に、入学前2月期および入学後の各測定時期の各大学観が入学後各測定時期の大学生活への適応感(大学適応・仲間志向)をどのように予測するかを調べるために、すべての測定時期の尺度項目に記入洩れなく回答した149名(男子66名、女子83名)について、入学後の各測定時期における大学観各尺度得点(1項目あたりの平均得点)、入学前2月期の同得点(同上)および両者の交互作用項を説明変数、各測定時期における大学生活への適応感を目

Table 1 各測定時期における大学適応・仲間志向尺度得点の平均値およびSD

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
		1年次 4月期	1年次 7月期	1年次 10月期	1年次 1月期	2年次 4月期	2年次 7月期	2年次 10月期	2年次 1月期	多重比較
大学適応 (N=262)	M	3.73	3.53	3.57	3.55	3.57	3.48	3.46	3.54	①>②~⑧ ③、⑤>⑥、⑦ ④、⑧>⑦
	SD	0.52	0.56	0.53	0.56	0.56	0.58	0.59	0.62	
仲間志向 (N=264)	M	3.52	3.53	3.51	3.55	3.63	3.51	3.52	3.56	⑤>②、③、 ⑥、⑦
	SD	0.72	0.71	0.68	0.68	0.70	0.75	0.74	0.74	

註：各得点のレンジは1~5である。

Table 2 各測定時期における各大学観尺度得点の平均値およびSD

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
		入学前 2月期	1年次 4月期	1年次 7月期	1年次 10月期	1年次 1月期	2年次 4月期	2年次 7月期	2年次 10月期	2年次 1月期	多重比較
出会い (N = 167)	M	4.26	4.14	4.06	4.08	3.99	4.00	4.00	3.98	3.97	①>③~⑨ ②>⑤
	SD	0.53	0.55	0.61	0.65	0.67	0.62	0.75	0.78	0.79	
モラトリアム (N = 166)	M	3.26	3.31	3.29	3.22	3.27	3.23	3.15	3.11	3.16	②、③、⑤>⑧
	SD	0.77	0.80	0.80	0.87	0.86	0.88	0.94	0.91	0.94	
勉強 (N=165)	M	4.53	4.55	4.42	4.42	4.47	4.46	4.44	4.42	4.44	①>③、④ ②>③、④、 ⑧、⑨
	SD	0.39	0.41	0.44	0.44	0.46	0.48	0.53	0.51	0.48	
自分探し (N = 165)	M	4.16	4.10	4.05	4.04	4.10	4.05	4.04	4.01	4.08	
	SD	0.55	0.63	0.63	0.63	0.64	0.63	0.71	0.73	0.68	
将来準備 (N = 166)	M	4.08	4.09	3.94	4.04	4.05	4.09	4.06	4.07	4.08	⑥>③
	SD	0.62	0.57	0.66	0.58	0.64	0.58	0.65	0.59	0.63	

註：各得点のレンジは1~5である。

的変数とした階層的重回帰分析(第1ステップに入学前2月期と各測定時期の各大学観得点を投入し、第2ステップに両者の交互作用項を投入)を、測定時期および大学観ごとに行った。第2ステップの標準化偏回帰係数(β)、決定係数(R²)、第1ステップからの決定係数の変化量(ΔR²)をTable 3に示す。

入学前2月期の大学観得点のうち、勉強の場は1年次4月期の大学適応および仲間志向との間に有意な正の関連が、また将来準備の場は1年次10月期の大学適応との間に有意な負の関連がみられたが、それ以外の各大学観はどの時期の大学適応・仲間意識との間にも有意な関連はみられなかった。

入学後について、まず、大学適応については、出会いの場は、すべての時期において各時期の大学適応との間に有意な正の関連がみられ、また、すべての時期において

仲間志向との間に有意な正の関連がみられた。消極的モラトリアムを過ごす場は、1年次4・7・10月期および2年次のすべての時期において大学適応との間に有意な負の関連がみられたが、仲間志向との間には2年次1月期において有意な負の関連がみられた。勉強の場は、1年次7・10・1月期および2年次のすべての時期において大学適応との間に有意な正の関連がみられ、1年次10月期および2年次10・1月期において仲間志向との間に有意な正の関連がみられた。自分探しの場は、1年次7・10・1月期および2年次のすべての時期において大学適応との間に有意な正の関連がみられ、1年次7・1月期および2年次7・10月期において仲間志向との間に有意な正の関連がみられた。将来準備の場は、1年次7・10・1月期および2年次のすべての時期において大学適応との間に有意な正の関連がみられ、1年次7・10・1月期および2年次4・7・10月期にお

Table 3 各測定時期における大学観と大学生生活適応に関する階層的重回帰分析の結果(第2ステップ)

		＜大学適応＞														
		出会うの場			酒酌的モラトリアムを過ごす場			勉強の場			自分探しの場			将来準備の場		
1年次	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
入学前	.010	-.045	-.115	-.093	-.079	.026	-.110	-.071	.261**	.092	-.066	-.002	.118	-.052	-.061	-.083
入学後	.214*	.316***	.330***	.355***	-.347**	-.228*	-.198*	-.168	.188	.345***	.483***	.364***	.158	.355***	.303**	.342***
前→後	.226**	.092	.033	.103	.092	-.070	.024	.103	.151	.106	.081	.068	.170*	.089	.118	.262***
R ²	.085***	.085**	.076**	.118***	.167***	.053*	.076**	.059*	.154***	.174***	.207***	.127***	.064*	.130***	.094**	.163***
ΔR ²	.050**	.008	.001	.010	.008	.005	.001	.010	.020	.011	.006	.005	.026*	.008	.014	.068***
2年次	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
入学前	-.081	.006	-.019	-.021	-.097	-.045	-.048	.032	.047	.094	-.003	.022	-.013	-.091	-.008	.049
入学後	.374***	.222*	.365***	.370***	-.196*	-.314***	-.289**	-.335***	.430***	.317***	.493***	.487***	.368***	.417***	.364***	.239*
前→後	.074	-.001	.100	.111	.119	.111	.024	-.002	.174*	.250**	.213**	.116	.169*	.131	.217**	.329***
R ²	.117***	.050	.139***	.142***	.080**	.125***	.099**	.102**	.207***	.187***	.227***	.249***	.158***	.179***	.185***	.148***
ΔR ²	.005	.000	.010	.012	.014	.012	.001	.000	.029*	.061**	.042**	.013	.028*	.017	.046**	.104***
		＜仲間志向＞														
		出会うの場			酒酌的モラトリアムを過ごす場			勉強の場			自分探しの場			将来準備の場		
1年次	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
入学前	.143	-.039	-.117	-.020	.056	.131	.061	.004	.298**	.148	.037	.125	.277**	.053	.179	-.031
入学後	.295**	.389***	.466***	.462***	-.241*	-.179	-.171	-.096	.048	.144	.304**	.158	-.015	.313***	.110	.297***
前→後	-.055	-.102	-.021	-.135	.100	.109	.103	.075	.081	.022	.047	.038	.017	.052	.085	.177*
R ²	.169***	.167***	.176***	.230***	.049	.032	.035	.016	.104**	.066*	.109***	.060*	.070*	.121***	.071*	.109***
ΔR ²	.003	.010	.000	.018	.010	.012	.010	.006	.006	.000	.002	.001	.000	.003	.007	.031*
2年次	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
入学前	-.048	-.156	-.045	-.088	.062	.047	.086	.087	.163	.107	.050	.047	.058	.023	.067	.124
入学後	.416***	.511***	.533***	.546***	-.112	-.098	-.146	-.219*	.077	.119	.278**	.292***	.195*	.361***	.354***	.185
前→後	-.077	-.028	.023	-.003	.162*	.098	.086	.056	.156	.087	.003	-.025	.199*	-.024	.088	.113
R ²	.169***	.224***	.268***	.272***	.056	.017	.023	.044	.058*	.041	.093**	.100**	.087**	.137***	.158***	.075**
ΔR ²	.006	.001	.001	.000	.026*	.009	.007	.003	.023	.007	.000	.001	.038*	.001	.008	.012

註:*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

いて仲間志向との間に有意な正の関連がみられた。

交互作用が有意なものについては、単純傾斜検定を行った⁸。その結果を Figure 1~18 に示す。全体的な傾向として、1)入学前の大学観得点が高い場合のみ、入学後の大学観と大学適応や仲間志向の間に有意な正の関連性が示された(ただし、消極的モラトリアムを過ごす場については、入学前の大学観が低い場合、入学後の大学観と仲間志向の間には有意な負の関連性が示された:Figure 1, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 14, 15, 16, 17, 18 参照)が、一方で2)入学前の大学観に関わらず、入学後の大学観が大学適応に有意な正の関連性を示したもの(2年次4・10月期の勉強の場、1年次10・1月期の将来準備の場:Figure 2, 4, 12, 13 参照)や、3)入学後の大学観が低い場合に、入学前の大学観と大学適応の間に有意な負の関連性を示したもの(1年次1月期および2年次4・10・1月期の自分探しの場、1年次1月期および2年次4・10月期の将来準備の場:Figure 6, 7, 8, 9, 13, 14, 15 参照)などがみられた。

考察

本研究では、大学入学予定者が入学前に大学に対して抱いているイメージ(大学観)が入学前後でどのように変化し、また、入学前後のイメージが入学後の大学生生活への適応をどのように予測するかを中心に検討を行った。

大学生生活適応の変化

まず、入学後の大学生生活への適応感の変化を調べるために、学校生活に対する意識の調査項目の大学適応尺度得点および仲間志向尺度得点について分析を行ったところ、大学適応については、1年次4月期(入学直後)が最も値が高く、1年次7月期に低下すること、また、1年次7月期と同10月期の夏期休暇期をはさむ間に差が認められなかったが、これについては、大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石(2013)や水野(2018)でも同様の結果が得られている。1年次4月期から7月期にかけての変化について、大隅ら(2013)は先行研究を踏まえ、「大学入学当初は新しい環境に対する期待の高さから大学適応感が高まるが、大学で過ごす時間が長くなっていくにつれて、最初に抱いていた高い期待や高揚感は現実的な状態に落ち着いていき、結果的に大学適応感の低下に繋がる(p. 133)」としており、また、水野(2018)は1年次4月期を「能動的適応期」、同7~10月期を「現実的適応期」と捉えている。1年次4月期から7月期以降の適応得点の低下を「大学適応の低下」と捉えるべきか、「現実化」と捉えるべきかについては今後も議論が必要であるが、水野(2018)が指摘しているように、大学適応尺度の得点が高いほど「適応している」と考えることについては、注意を要するといえよう。

また、今回の大学適応得点の結果は、水野(2018)のモデルでいう1年次1月期のさらなる低下(収束的適応期)や2年次4月期における仕切り直し効果による「再能動化」は

認められず、むしろ2年次1月期に「再能動化」的な変化が確認された。このような相違については、さまざまな要因が考えられるが、今後もさらなる検討を行い、大学適応モデルを構築していく必要がある。

一方、仲間志向については2年次4月期が最も値が高く、その前後の時期よりも有意に高いという結果が得られた。これに対し、水野(2018)は同様の測定時期に縦断的調査を行っているが、測定時期の主効果は有意ではなく、今回とは異なった結果を得ている。両者の違いの原因については、本研究のデータのみから明確にすることは困難であるが、これも今後の検討課題といえよう。

大学観の変化

次に、大学観の変化についてみると、まず、大学を「出会いの場」とするイメージは、入学前2月期は入学後(とくに1年次7月期以降)よりも高く、入学前には新たな出会いへの期待が大きいことが窺える。入学後に低下してしまうことは、期待とのギャップとみることもできるが、入学後はごく一部を除いてほとんど変化がなく、また各測定時期の平均値は理論的中央値(3点)を1点程度上回っており、大学が出会いの場であるというイメージは、入学後もそれほど大きく崩れてはいないと考えられる。同様のことは「勉強の場」についてもいえる。「勉強の場」というイメージは、入学前と入学後1年次7・10月の間に差がみられ、さらに入学直後の1年次4月期は、さらに2年次10・1月期とも差がみられた。これらのことから、入学予定者は入学前もしくは入学直後の段階において、大学への学びに対する期待が大きいと考えられる。そのイメージが入学後しばらくして低下することは、やはり期待とのギャップと捉えることができるが、「出会いの場」の場合と同様に、入学後(1年次7月期以降)は大きな変化はみられず、また各測定時期の平均値が理論的中央値を1点以上も上回っていることなどからも、やはり入学後にそのイメージが大きく崩れているわけではないと考えられる。

これらの大学観に入学前後で差がみられたことについて考察すると、まず「出会いの場」については、京都教育大学(2020)が大学新生を対象に行った調査において、「(大学に)入学する前もとても不安だったことは何ですか?」という質問には「友達が出来るかどうかが最も高かったことを報告している。この結果は、大学入学者が新たな人との出会いがうまくできるかどうかの不安を表していると考えられるが、その裏返しとして、「大学は出会いの場であってほしい」という期待の高まりを反映している」と捉えることもできる。よって、このことが入学前後の差として表れたとも考えられる。また、「勉強の場」については、半澤(2007)がいくつかの先行研究をもとに、「一般的には大衆化したといわれている大学生であっても、学業を志向して大学進学を考えている傾向が少なからずあることが推察される(p.16)」と論じており、大学入学予定者は大学で新たなことを学べること

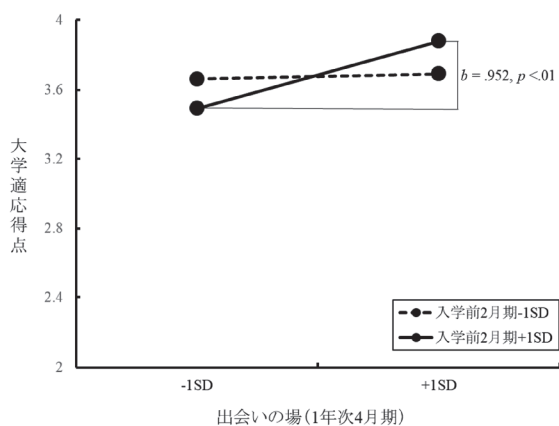


Figure 1 単純傾斜検定の結果(大学適応: 出会いの場 1年次4月期)

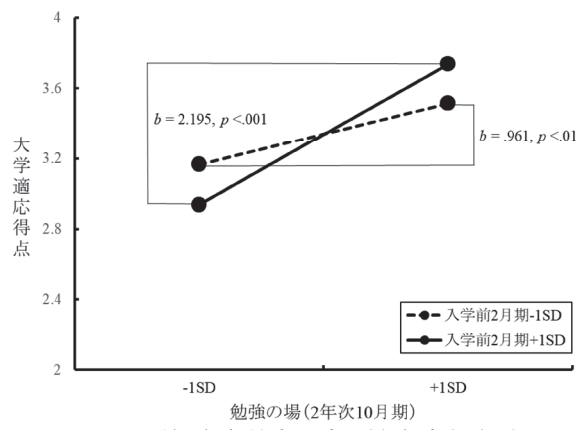


Figure 4 単純傾斜検定の結果(大学適応: 勉強の場 2年次10月期)

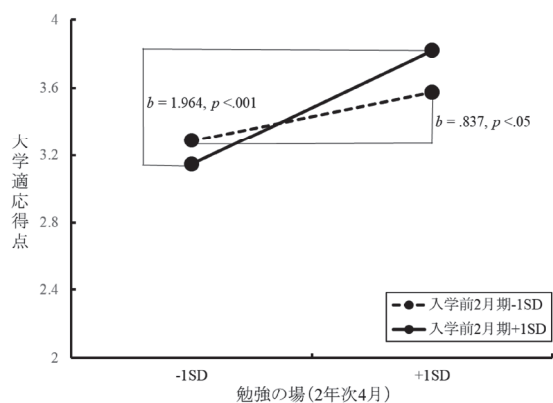


Figure 2 単純傾斜検定の結果(大学適応: 勉強の場 2年次4月期)

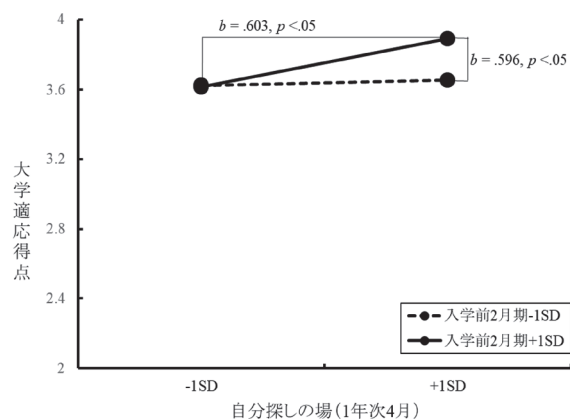


Figure 5 単純傾斜検定の結果(大学適応: 自分探しの場 1年次4月期)

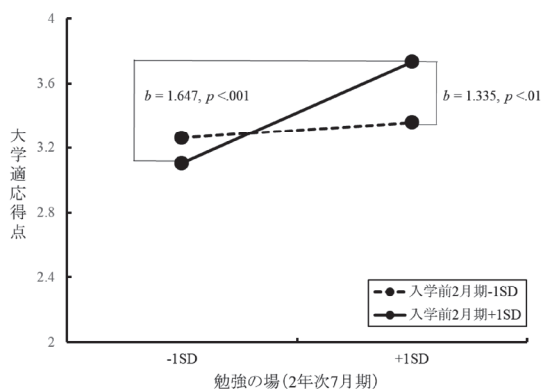


Figure 3 単純傾斜検定の結果(大学適応: 勉強の場 2年次7月期)

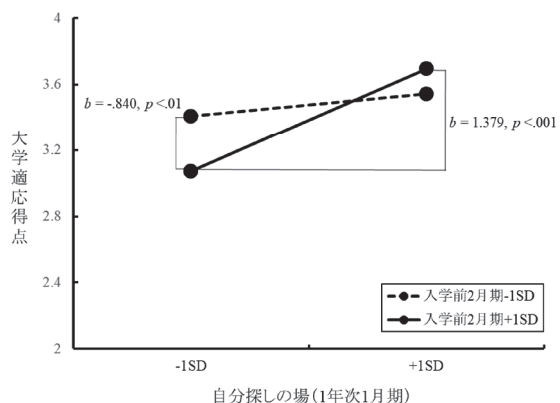


Figure 6 単純傾斜検定の結果(大学適応: 自分探しの場 1年次1月期)

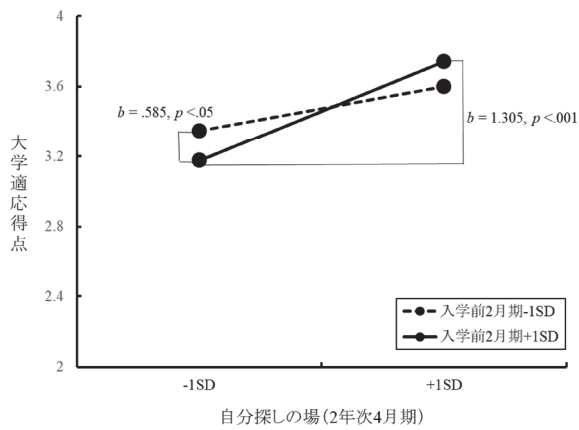


Figure 7 単純傾斜検定の結果(大学適応:自分探しの場 2年次4月期)

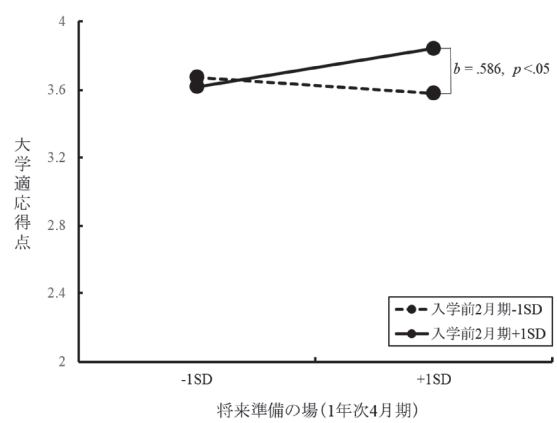


Figure 10 単純傾斜検定の結果(大学適応:将来準備の場 1年次4月期)

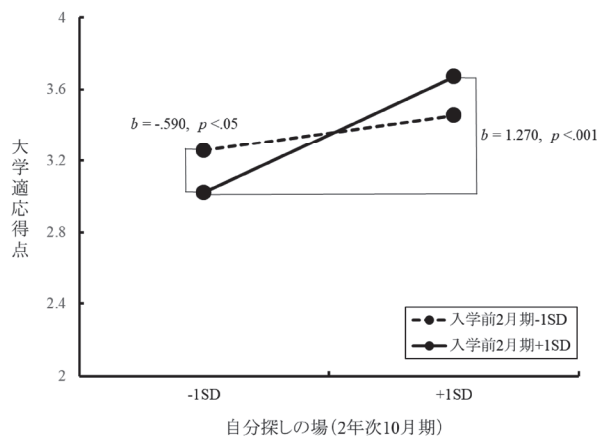


Figure 8 単純傾斜検定の結果(大学適応:自分探しの場 2年次10月期)

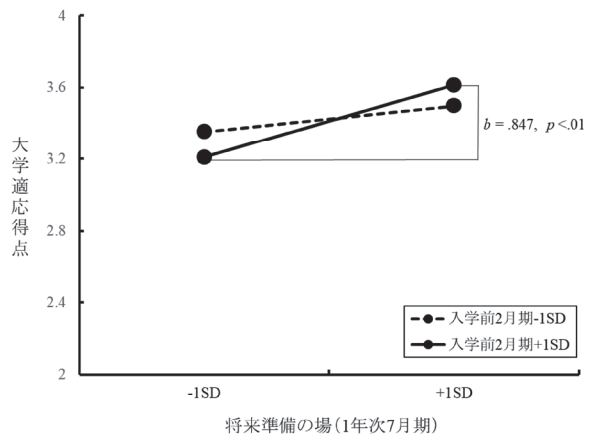


Figure 11 単純傾斜検定の結果(大学適応:将来準備の場 1年次7月期)

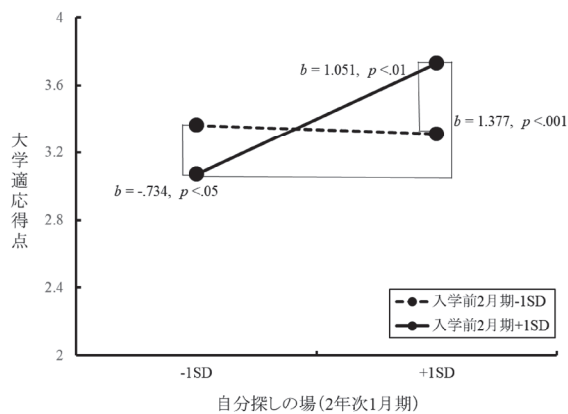


Figure 9 単純傾斜検定の結果(大学適応:自分探しの場 2年次1月期)

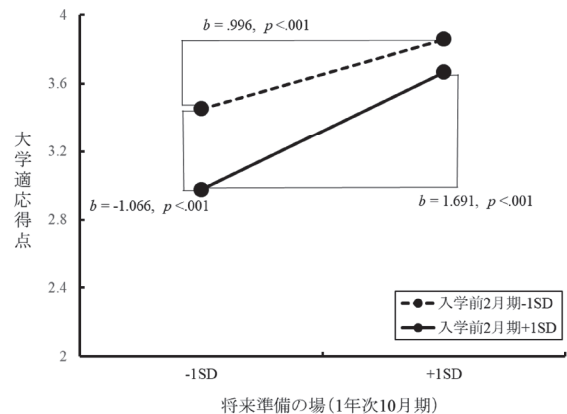


Figure 12 単純傾斜検定の結果(大学適応:将来準備の場 1年次10月期)

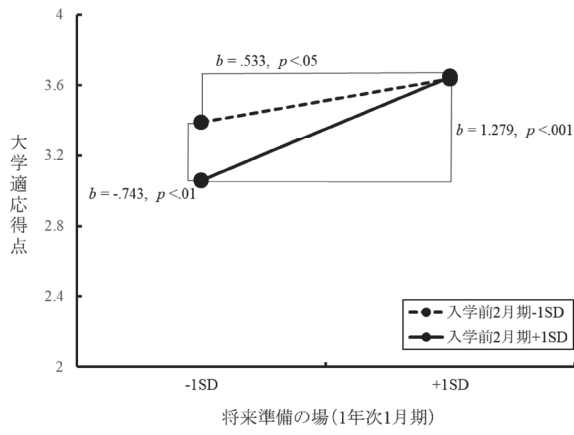


Figure 13 単純傾斜検定の結果(大学適応:将来準備の場 1年次1月期)

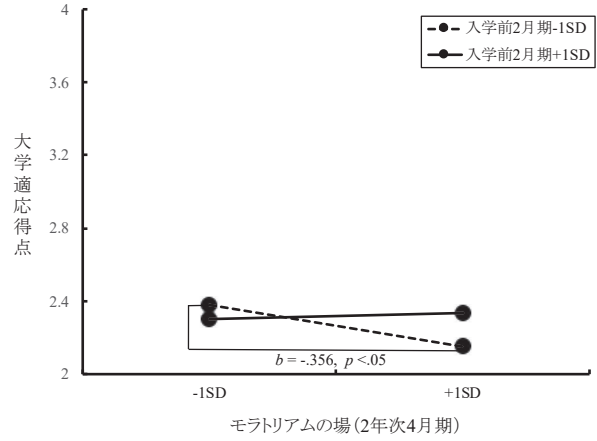


Figure 16 単純傾斜検定の結果(仲間志向:消極的モラリアムを過ごす場 2年次4月期)

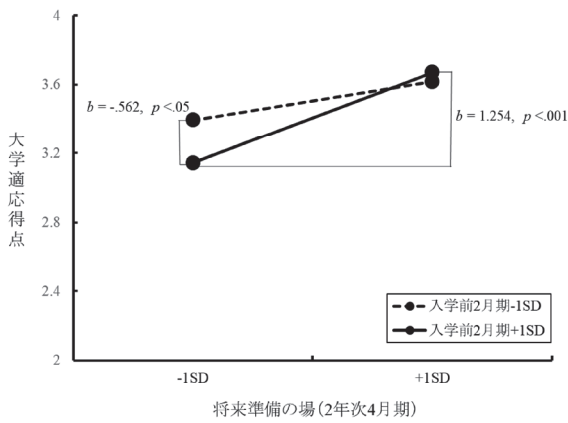


Figure 14 単純傾斜検定の結果(大学適応:将来準備の場 2年次4月期)

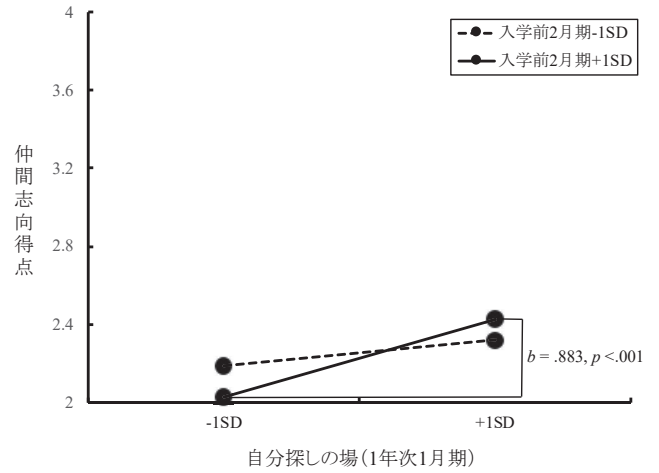


Figure 17 単純傾斜検定の結果(仲間志向:自分探しの場 1年次1月期)

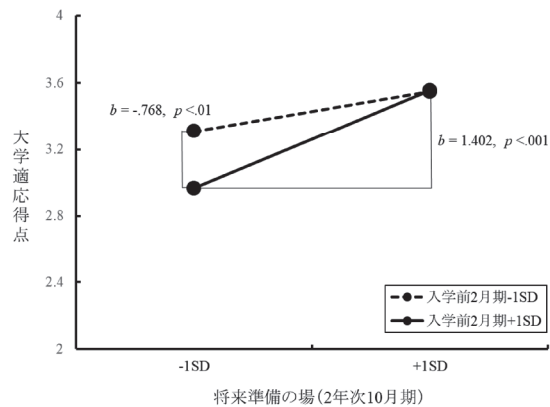


Figure 15 単純傾斜検定の結果(大学適応:将来準備の場 2年次10月期)

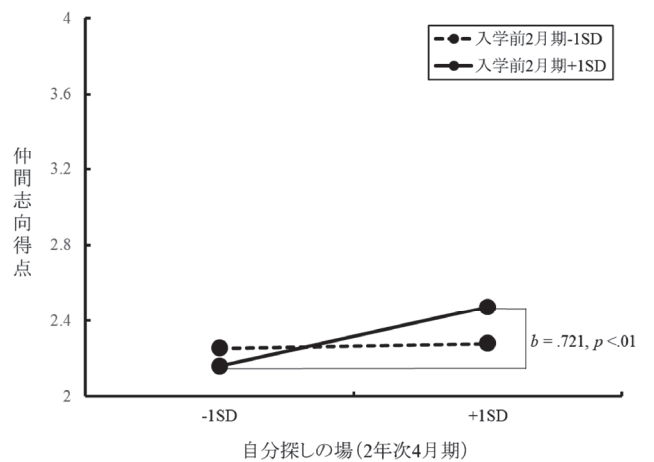


Figure 18 単純傾斜検定の結果(仲間志向:自分探しの場 2年次4月期)

に大きな期待を抱いており、それが入学前後の差として表れたと考えられる。

一方、「消極的モラトリウムを過ごす場」、「自分探しの場」、「将来準備の場」については、入学前後で差はみられなかった。このことは、大学入学予定者は少なくともこれらのイメージについては、過度な期待はしていないことが考えられる。その理由のひとつとして、現代はインターネットを中心にさまざまな情報を簡単に入手することが可能であり、大学生活の様子もある程度知ることができることなどが影響しているかもしれない。また、大学をモラトリウムの場とするイメージはむしろ2年次あたりから低下している。これは、大学生活やアルバイトなどの社会経験を通して、大学は単なる逃げ場ではないということが学習できていることの表れではないかと考えられる。さらに、大学を「自分探しの場」や「将来準備の場」とするイメージは入学前から入学後2年次終了ごろにかけて、ほぼ変化はみられなかった。このことは、大学は自分探しや将来に向けて準備をするところであるというイメージが入学前から入学後もふつうに定着していることを表していると考えられる。

ところで、溝上(2004)は大学入学後から大学観の変化を経年的に比較しているが、それによると、入学期の「勉強の場」はそれ以降の時期との間に有意な差がみられなかったこと、「将来準備の場」は低下し、「消極的モラトリウムを過ごす場」は上昇しているなど、本研究の結果とは合致しないところがみられる。これは、調査方法や調査時期などの違いが影響しているかもしれない。一方で、「勉強の場」の得点が一貫して他より高く、「出会いの場」が次に、「自分探しの場」と「将来準備の場」がそれに続き、「消極的モラトリウムを過ごす場」は最も低い点は本研究の結果とも合致しており、あくまでも相対的なものではあるが、大学生は大学を一貫して「勉強の場」と考えている様子が窺える。

入学前後の各大学観と大学生生活適応との関係

つづいて、入学前および入学後の大学観が大学生生活への適応感をどのように予測するかを調べるために、各大学観について測定時期ごとの階層的重回帰分析を行った。その結果、まず、入学前の大学観は入学後の大学適応とほとんど関連しなかった。一方で、入学後の各測定時期の各大学観はそのほとんどが各時期の大学適応に関連した。また、仲間志向については、これも入学前の大学観とはほとんど関連がみられず、入学後の各時期の大学観は、大学適応ほどではないが、いくつかの大学観・測定時点での関連がみられた。これらのことから、入学前の大学イメージは入学後の大学生生活適応感を予測できず、むしろ入学後のリアルタイムの大学イメージの方が各時期の大学生生活適応感を予測しうることが明らかとなった。すなわち、入学前にどのような大学イメージを持っていても、入学後にそのイメージが前向きな方向に変化すれば、大学生生活に適応しうることであり、ある意味当然のことといえよう。

そこで、入学前後のギャップの影響を調べるために、入学前後の大学観の交互作用について検討を行ったが、まず、有意であったもののほとんどが、ある大学観を入学前に強くイメージしていた場合、入学後もそのイメージが強いほど大学生生活に適応しているという傾向がみられた。このことは逆に、入学後にはそのイメージが弱くなるほど適応が低下していると言い換えることができ、入学前後でのギャップがマイナス方向になるほど不適応的になるということを表しているといえよう。とりわけ、「将来準備の場」や「自分探しの場」は多くの測定時期でそのような結果がみられたが(Figure 5, 6, 7, 8, 9, 11, 14, 15, 17, 18 参照)、これらのイメージは将来設計像や自己形成期待に関するものであり、自己のアイデンティティに関わるものと考えられる。それゆえ、これらのイメージが入学前後でマイナス方向にギャップが生じることは、アイデンティティの揺らぎを感じさせることとなり、大学生生活への適応感も低下させることになると考えられる。また、これらのイメージのギャップによる適応感の低下は、入学後のある時期だけではなく、比較的長期的にわたって継続しており、さらに1年次1月期以降は、これらのイメージをあまり感じていない場合、入学前にはそのように感じていた方が感じていなかったよりも、大学に適応していないという結果も得られている(Figure 6, 7, 8, 9, 13, 14, 15 参照)。これらのことから、個人のアイデンティティに関わるギャップによる大学生生活不適応への影響は長期化するとともに、深刻な影響を及ぼす恐れが考えられる。もちろん、先にみたように、「自分探しの場」や「将来準備の場」というイメージは入学前から一貫して変化がほとんどみられず、しかも各時期の平均値は理論的中央値を1点以上も上回っているのがほとんどであり(Table 3 参照)、それゆえに、マイナスのギャップを強く感じる学生はそれほど多くはないのかもしれない。しかし、逆にマイナスのギャップを強く感じた学生にとっては、周囲(特にギャップも感じず、アイデンティティの揺らぎもない学生たち)との比較によって、自己嫌悪に陥り、さらに不適応感が強まることが予測される。

「勉強の場」については、2年次から有意な結果が得られているが、これは2年次から専門性の高い授業が始まり、授業についていけるかななどの問題が影響していると考えられる。しかし多くの場合、入学前にこのイメージを強く感じていたか、そうでなかったかに関わらず、現時点での「勉強の場」というイメージが強いほど適応しているという結果にもなっており、これについては、ギャップよりも現時点のイメージの影響の強さによるもの大きいと考えられよう。

今後の課題

最後に、本研究における問題点や課題についていくつか挙げる。

まずはじめに、今回のデータで入学前後に関わるものはすべて入学予定者のものであり、いわゆる「不本意入学者」

が少なかった可能性が考えられる。大学生生活不適応の原因として、不本意入学は多くの研究で指摘されており、たとえば大隅他(2013)でも、入学した大学が第1志望ではないほど、大学生生活への適応感が低いという結果が得られていることなどから、この点を考慮して結果を吟味していく必要があるだろう。

次に、調査対象者が心理学系という特定の学部への進学者であり、今回の結果を一般化できるかどうかという問題がある。たとえば、「自分探しの場」や「将来準備の場」について、入学前後のギャップが大学生生活への適応に関連することが指摘されたが、学部によっては入学とその後の進路が直結もしくは想定可能な場合もあり、そのような学部においては同様の結果が得られるかどうかは疑問が残る。

第三に、すべての質問に回答したデータのみを分析対象としているが、これはすべての質問に回答できるほど授業等に出席をしていることでもあり、ある意味「適応的」な対象者のデータに基づいた検討を行っていることになるとも考えられる。このことはサンプルの偏りを意味するものであり、その点からも、今回の結果をどこまで一般化できるかには問題が残るといえる。

第四に、大学観尺度は杉浦他(2003)によれば、大学生への調査から得られた回答に基づいて作成されたものであり、同じ内容を入学予定者にたずねても、内容的に十分な理解ができたかという問題が考えられる。また、大学のイメージは、これらの大学観だけで説明できるものでもなく、千島・水野(2015)が取り上げた「時間的ゆとり」や「行事」といった、より大学のライフスタイルに沿ったイメージの影響も大きいと考えられる。このような点にまで言及できていないことは、やはり問題点として挙げられる。

今後はこのような点も考慮しつつ、研究を進めていく必要があるが、それと同時に、今回のように入学前のデータを活用していくことは重要であると思われる。

引用文献

- 千島 雄太・水野 雅之 (2015). 入学前の大学生生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響—文系学部の新入生を対象として— 教育心理学研究, 63, 228-241.
- 半澤 礼之 (2007). 大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成 キヤリア教育研究, 25, 15-24.
- 金子 千香・平林 茂・菅沼 一男・大日向 浩・丸山 仁司 (2015). 専門職への意識と大学生生活に対する入学前のイメージとが理学療法学科新入生に及ぼす影響 理学療法科学, 30, 595-598.
- 京都教育大学 (2020). 【受験生必見】大学生生活については勉強しましたか? その① アンケートで判明! みんなの不安トップ 3 Retrieved from <https://www.kyokyo-u.ac.jp/webmagazine/2020/02/-3.html> (2021年9月25日)
- 水野 邦夫 (2018). 大学入学者の大学生生活への適応プロセスに関する研究—入学から卒業までの変化および偏差値の影響について— 帝塚山大学心理科学論集, 1, 1-8.
- 溝上 慎一 (2004). 大学新入生の学業生活への参入過程: 学業意欲と授業意欲 京都大学高等教育研究, 10, 67-87.
- 文部科学省 (2020). 令和2年度学校基本調査(確定値)の公表について Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200825-mxt_chousa01-1419591_8.pdf (2021年9月20日)
- 二宮 克美 (1990). 学校生活における青年 久世 敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 (pp.158-182) 福村出版
- 大隅 香苗・小塩 真司・小倉 正義・渡邊 賢二・大崎 園生・平石 賢二 (2013). 大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討—第1志望か否か, 合格可能性, 仲間志向に注目して— 青年心理学研究, 24, 125-136.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 杉浦 健・尾崎 仁美・溝上 慎一 (2003). 大学は何をする場所? (1) 日本心理学会第67回大会発表論文集, 1198.

註

- ¹ 本研究のデータの一部は、日本心理学会第83回大会ならびに日本社会心理学会第60回大会でポスター発表された。
- ² 291名中184名(男子91名, 女子93名)は、入学前年度の11月期に大学主催の入学前準備行事にも参加し、その際にも大学観尺度への回答に応じたが、そのデータについては、今回は割愛する。
- ³ この尺度は、そもそもは大学生を対象に作成されたものではないが、項目内容は大学生にも適用できると判断し、使用することとした。二宮(1990)はこの尺度のことを「大学適応尺度」とは称していないが、本研究では大学生の適応の尺度として使用しているので、この名称とした。
- ⁴ 除外された項目は、「この学校に対して親しみを感じる(大学適応項目)」、「友だちと一緒にいると楽しい(仲間志向項目)」、「勉強以外のことを友だちとよく話す(仲間志向項目)」であった。
- ⁵ 本研究では大学生生活への適応を、大学適応尺度と仲間志向尺度の2尺度を用いて測定している。そこで、各尺度を用いた結果から導き出されたことについては、「大学適応」、「仲間志向」と表記するが、両者を含めた大学生生活への適応を述べる場合には、「大学生生活への適応(大学生生活適応)」と表記する。
- ⁶ この分析では入学前のデータは含まれないので、本研究の趣旨にそぐわないと考えられる。しかし、入学後の大学生生活への適応の過程を検討することは、大学生生活適応という観点では有意義であると考えられるため、敢えてこの分析を行った。
- ⁷ 対応のある分散分析において、Mauchlyの球面性検定の結果が有意であった場合、その後はGreenhouse-Geisser検定を行ったため、自由度の値は整数でない(以下同様)。
- ⁸ 回帰式自体が有意でなかった場合でも、 ΔR^2 が有意であった場合は、単純傾斜検定を行った。

How do prospective students' views of university predict their adjustment to university life? : An examination based on longitudinal data from pre-enrolment to two years post-enrolment.

Kunio MIDZUNO

Abstract

This study examined how students' pre- and post-enrolment images of university (their views of university) predicted their adjustment to university life. First, 291 prospective students (151 males and 140 females) were asked to complete a questionnaire on their views of university before entering university, and then to complete the similar questionnaire eight times over a period of approximately two years after entering university, in order to analyse changes in their views of university before and after entering university. The results show that 1) the image of the university as a "place to meet" and "place to learn" are significantly higher before than after enrollment, however those image after enrollment are not so low, and there is little drastic change in the image before and after enrollment, and 2) there was no significant difference between the images of university as "a place of passive moratorium" and "place for self-discovery" and "place to prepare for the future" before and after enrolment, indicating that these views of university were firmly established even before enrolment. Students were then completed a questionnaire about adjustment to university life at a total of eight points in the first two years of university, and there were analysed how views of university before enrollment and those at each point after enrollment predicted adjustment. The results showed that 3) the image of the university before enrolment was less relevant to adjustment to university life after enrolment, however the image of the university after enrolment was relevant in many cases, and that the real-time image of the university after enrolment was more predictive of adjustment to university at each point in time, and 4) it was discussed that the negative gap between pre- and post-enrolment images of university as a "place for self-discovery" and "place to prepare for the future" was a relatively long-term predictor of maladjustment and could have serious consequences. And the problems of the study were also discussed.